

氏名・(本籍地) 由井 恭子(東京都)
学位の種類 博士(文学)
学位記の番号 乙第93号
学位授与の日付 令和元年9月25日
学位論文題目 『平家物語』芸能説話研究
論文審査委員 主査 大場 朗
副査 山本章博
副査 林田康順
副査 菅野扶美

由井恭子氏 学位請求論文審査報告書

『平家物語』芸能説話研究

論文の内容の要旨(1200字以上)

本論文は、「『平家物語』芸能説話研究」と題し、序章、結章と、十六章五節からなる論考である。目次は、以下のとおりである。

序章 『平家物語』芸能説話の研究対象と研究史

- 一 『平家物語』研究の現在
- 二 『平家物語』芸能説話研究の現在

第Ⅰ部 『平家物語』芸能説話 一後白河院とその周辺一

- 第一章 後白河院周辺の芸能
- 第二章 寵妃建春門院の「宣旨を反す舞」
- 第三章 以仁王と笛
- 第四章 高倉院と芸能
- 第五章 後高倉院とその周辺
- 第六章 鬼界島の熊野詣
- 第七章 「長門本」藤原成経像小考 一万秋楽の秘曲を手がかりとして一

第Ⅱ部 平家ゆかりの人々の芸能

- 第一章 平家の人々の芸能活動
- 第二章 平経盛と笛の秘曲
- 第三章 平経正
 - 第一節 経正と青山の琵琶説話考
 - 第二節 『平家物語』における青山の琵琶説話
 - 第三節 経正竹生島詣考
- 第四章 平重衡と千手前
 - 第一節 重衡と千手前 一酒宴における芸能場面一
 - 第二節 千手前について 一管絃講との関わりから一

第Ⅲ部 『平家物語』に描かれる芸能

- 第一章 興福寺常楽会
- 第二章 興福寺常楽会考 一楽書『體源鈔』を中心に一
- 第三章 『平家物語』に描かれた名楽器 一玄上・鈴鹿を中心に一
- 第四章 万秋楽の秘曲 一弥勒信仰との関わりから一
- 第五章 『體源鈔』における万秋楽 一豊原統秋の法華信仰との関わりから一

結章

- 一 『平家物語』芸能説話生成の手法
- 二 『平家物語』芸能説話における虚構の意図と編者像

- 三 『平家物語』諸本比較から明らかになったテキストの特徴
- 四 明らかになった歴史的事実
- 五 仏教と芸能の関係が『平家物語』に与える影響

本論文の要約は次の通りである。

序章では、研究史を振り返り、研究成果の到達点や問題点などを的確に整理し、本論展開への序としている。

第Ⅰ部「『平家物語』芸能説話—後白河院とその周辺—」では、『平家物語』芸能説話の中から、後白河院に関連する人物の説話を抜き出して考察した論考が収められている。

第一章では、後白河院が催した管絃場面の説話構造を取り上げている。具体的には、妙音院師長や源資賢などが演奏者として登場し、史実と重なる箇所と、花山院公高のように未詳の人物が登場し、虚構と考えられる箇所があることを明らかにし、既存の説話の型を改変し、『平家物語』の中に取り込む説話構造を指摘している。

第二章では、「延慶本」に残される、建春門院と秘曲胡飲酒の舞の説話に着目し、胡飲酒が、多氏と源氏にのみ伝承される秘曲であることを確認。また、胡飲酒を伝承していた多氏が殺害され、伝承が断絶してしまう事件が起き、後に堀河院からの委託を受け、源雅実から多忠方に伝授が許され、再び多氏が伝承することとなった歴史も明らかにしている。くわえて、本説話に、建春門院が登場するのは、権力者が芸能を掌握していた史実と関連があると論じている。

第三章では、以仁王と笛にまつわる説話に考察を加えている。具体的には、「延慶本」に、以仁王が鳥羽院伝来の笛を相承している記述に着目し、笛は当時天皇が学ぶべき学問の一つであり、特に堀河天皇、鳥羽天皇は笛を愛していたことから、「延慶本」編者は、以仁王が王位を継ぐに値する人物であることを意図したのではないかとする。すなわち、以仁王の正当性を訴えるために、その象徴的楽器として笛が選ばれ、名器、蟬折とともに以仁王を登場させたと結んでいる。

第四章では、高倉院と芸能者に関する説話を取り上げている。まず、本説話の異同を各テキストで比較検討している。その結果、「延慶本」「長門本」は『今鏡』の記述と近く、「盛衰記」は『癸心集』『続教訓抄』に近い記述であることを実証している。これらのことから、「延慶本」が『今鏡』の説話をもとに物語の中に取り込み、「盛衰記」が『癸心集』『続教訓抄』を参照し、説話をさらに書きかえたと論じている。

第五章では、後高倉院の琵琶を中心とする音楽に関する事績の解明を試みている。その結果、後高倉院が、藤原実宗により、琵琶の手ほどきを受けていたことを、「管絃御伝授記」に基づいて明らかにしている。また、『文机談』の記事によって、後高倉院が、実宗亡き後、孝道に琵琶を習い、さらに、その娘達を扶持し、孝時に琵琶を伝えていることを踏まえて、後高倉院と琵琶西流の人々の交流の様子も明らかにしている。さらに、後高倉院自身が琵琶の譜を蒐集し、注を施している場面も合わせて報告している。

第六章では、鹿ヶ谷事件により鬼界島に流罪となった平康頼と藤原成経の熊野詣のくだりを取り上げ、思想信仰の面から詳細な考察を加えている。その結果、「延慶本」は、康頼に関する芸能説話を載せ、阿弥陀信仰を中心に描き、「長門本」は成経に関する芸能説話を載せ、観音信仰を描き、「屋代本」「覚一本」では、千手観音信仰を色濃く描き、巖島信仰にも触れていることを読み取り報告している。さらに、院政期における熊野詣の実態や、団体信仰、後白河院の千手観音信仰についても言及し、『平家物語』が編纂された時代が、「熊野三所の本地でもある、阿弥陀と薬師、阿弥陀と観音の団体信仰が盛んになってくる時期と重なるが、本説話に団体信仰は見られない」と指摘する。しかしながら、安徳天皇入水場面に院政期の団体信仰を窺わせる記述が残されていることから、『平家物語』編者は、団体信仰に関する知識を有してはいたが、本説話に関しては、熊野三山に目を向け、説話を構成したのではないかと論じている。特に、語り本系テキストには千手観音信仰が色濃く描かれており、後白河院の今様弟子としての康頼の印象が強いことを指摘している。最後に、巖島信仰と竜神信仰に言及し、康頼と息子栄尊が水にまつわる伝承があることから、両信仰との関連性も指摘している。

第七章では、藤原成経が「長門本」で笛の名手とされていることに注目し、その芸能関係の事績について考察している。父成親は、当時を代表する音楽の名手師長などとともに、笛を演奏している記録が『玉葉』に残されていることから、笛の上手であったと推認し、さらに、成経の女兄弟である女性が、妙音院師長の室であり、箏をよくしたことを、『秦箏相承系図』により明らかにし、成経自身も後白河院の安元御賀で舞を披露し、それが『建礼門院右京大夫集』に「光源氏の例も思ひ出でらる」と称されていたことも紹介している。以上の点から、成経が、父や兄弟など芸能に秀でた者に囲まれている環境にあったことを導き出している。また、父成親が笛の名手であったこ

とから、それを「長門本」編者が取り入れた可能性も指摘している。

第Ⅱ部「平家ゆかりの人々の芸能」では、平家に関連する人物の説話を中心とした論考となっている。

第一章では、武家である平家が貴族化していく過程において、清盛らが芸能を取り入れていく様子を確認している。具体的には、『伊都岐嶋千僧供養日記』からは、清盛が、楽人に依頼し、厳島内侍にその芸を教えさせる様子が記されていることを、厳島内侍の芸能の質が高かったことについては、『高倉院厳島御幸記』や『梁塵秘抄口伝集』の記述から導き出している。また、「長門本」「盛衰記」には、清盛が楽の名人を集め、代々の宝物楽器を弾かせた説話が残され、『義経記』には、清盛の楽器にまつわる伝承が残されていることを踏まえて、そこから、清盛が楽器の名器を譲り受け、蒐集していたと人々から認識されていた、あるいはその可能性がある人物として物語編者に捉えられていたのではないかと論じている。さらに、重盛の子息維盛は、笛、付歌、舞に優れ、資盛は箏を修得し、『箏相承系図』に師長の弟子として記載され、両者は武人というより芸能の素養を身につけた雅な貴公子であったことを指摘している。

第二章では、「延慶本」に残る、経盛の笛の秘曲説話を取り上げている。経盛が笛の秘曲を伝授されていることや、後白河院による堀河院の報恩講供養、経盛都落ちに際しての弟子への秘曲伝授などについては、他の資料から確認がとれないことから、物語編者による創作ではないかとする。しかしながら、論者は、演奏曲、伝授曲については、秘曲として大切にされていたものであったことを重視して、説話自体には、虚構部分を含みながらも、曲目が秘曲であることによって、リアリティーを持たせようとしたのではないかと結論する。

第三章では、経正の青山の琵琶説話と、竹生島詣についての論考を収めている。第一節は、青山の琵琶説話の出典の考察となっている。論者はまず、「延慶本」が『宝物集』を引用する際に、ある部分をそのまま抜き出すのではなく、その前後にある説話も「延慶本」の中に取り込み、改変していく特徴に着目している。次にその特徴を本説話に援用して調査したところ、『古事談』の本説話前後には、「延慶本」との類似説話が多く配列されていることから、本説話の出典は『古事談』ではないかと、この結論を導き出している。第二節では、青山の琵琶説話を各テキストで比較している。その結果、「延慶本」「長門本」「盛衰記」の配列順が同じであること、「盛衰記」の増補記事が「覚一本」と同内容のものもあることを明らかにしている。第三節では、経正の竹生島詣についての考察となっている。論者はまず、本説話が確認できるテキストとして、「覚一本」「屋代本」「盛衰記」「南都本」をあげ、これらが、室町時代以降に増補され完成されたものであることを指摘している。また、室町時代以前の竹生島の歴史や資料を調査している。その結果、歴史記録も少なく、文学作品に登場する機会も少なかったが、室町時代になると、足利将軍家から信仰を得ることとなり、社会的にも竹生島が注目されるようになったと論じている。具体的には、この時期に、『竹生島縁起』の増補改訂や、書写がふたたび行われ始め、また、比叡山でも竹生島への注目が高まり、『溪嵐拾葉集』などの記録に残されていることに、それが認められるとする。こうした時代背景があつて、物語編者が、竹生島についての記述を物語の中に取り込もうとし、琵琶や芸能の主人公として経正が選ばれたのではないかと結んでいる。

第四章では、南都焼き討ちという重罪を背負った重衡と、千手前の芸能場面について考察となっている。第一節では、重衡と千手前の酒宴場面で「五常楽」「皇饗」「廻骨」の曲が演奏されたことに着目し、これらの曲目が、『極楽聲歌』『楽邦歌詠』『順次往生講式』にも掲載されていることを確認している。論者は、これらの関係について、「当時都で流行した『極楽聲歌』のようなもの(必ずしも文字になっていたものとはかぎらない)を、真源が『順次往生講式』のなかに取り入れて、その後『楽邦歌詠』のような講式練習用の抄出本が出てきたのではないかと論じている。また、本場面には、重衡の極楽往生を願う、今様や朗詠も配列されている。これらは『順次往生講式』の思想と重なっていることから、本講式が、説話構成に深く関わっていたのではなかと指摘している。第二節では、重衡と千手前の芸能と管絃講との関係について解明を試みている。第一節の考察結果に基づいて、論者は「『平家物語』が生成されてくる時代には、管絃を伴う「往生講」が催されていたこと、そうした背景が影響して、重衡と千手前の酒宴場面は、仏敵となった重衡の極楽往生を願う「管絃講」を描いているのではないかと論じている。

第Ⅲ部「『平家物語』に描かれる芸能」では、興福寺の常楽会や、楽器、万秋楽の秘曲について考察した論考が収められている。第一章では、興福寺常楽会の実際について考察している。「延慶本」では、治承五(一一八一)年三月に、興福寺で「恒例ノ三会」が行われ、それが、「十四日舍利会、十五日涅槃会、十六日常楽会」であると記されている。しかし、興福寺の三会は、維摩会、正月の御齋会、三月の薬師寺最勝会を指すのが一般的であることから、先行研究ではこの記述は史実と異なるとされていた。そこで、論者は、『興福寺年中行事』『諸寺縁起集』『教訓抄』に見られ

る、常楽会に関する記述を精査し、興福寺常楽会が二月十五日を中心に、複数の日程にわたり開催されていたこと、それらの法会は、常楽会後夜や、法花会、舍利会などと呼ばれ、表記が統一されていないという事実を指摘している。これらの事実に基づき、「延慶本」の「十四日舍利会、十五日涅槃会、十六日常楽会」の記述は、誤りとは言い切れず、史実に近い部分もある、と結んでいる。

第二章では、楽書『體源鈔』に見られる、興福寺常楽会についての考察結果を報告している。興福寺常楽会は、大法会であったが、歴史資料が少なく、その実態は不明な部分が多い。しかし、論者は、楽人豊原統秋によって編纂された『體源鈔』に着目し、興福寺常楽会の解明を試みている。『體源鈔』の成立は、長正九(一五一二)年で、同書には、仁平三(一一五三)年から応永元(一三九四)年までの、二四一年にわたる常楽会の記録が残されている。しかし、一四〇〇年代以降の常楽会の記録が残されていないことから、常楽会が一四〇〇年代には衰退していたのではないかと指摘している。また、常楽会で還城楽、納蘇利、荒序、万秋楽などが演奏されたことや、猿笛という楽器を使用したこと、そして、蛮絵装束を用いるなどの具体的様子も明らかにしている。

第三章は、『平家物語』に描かれた名楽器についての論考となっている。たとえば、「延慶本」は、瑟の名器として「秋風・螺鈿」をあげているが、『愚聞記』や『絲竹口伝』には、箏の名物として、「秋風・大螺鈿・小螺鈿」があげられていることから、「延慶本」の誤りを指摘している。また、「長門本」「盛衰記」では、「延慶本」の誤りを避け、改変した記述になっていることも論じている。

第四章では、弥勒信仰と関わり深い万秋楽の秘曲について論じている。まず、日本での弥勒信仰が、奈良時代から見られ、中世になると貞慶によって確立され、その後、長期間にわたり信仰されてきた歴史を確認している。その上で、『教訓抄』や『體源鈔』を精査したところ、万秋楽は弥勒菩薩の都率天で奏でられた曲として、伝承されているとする新見を報告している。また、『琵琶秘曲伝受記』や『秘曲伝受月々例』などの記録により、万秋楽が、琵琶や笛の秘曲としても扱われ、秘曲伝授の儀式的対象曲であったことも指摘している。

第五章では、『體源鈔』における豊原統秋の信仰について、付記を中心に考察を加えている。具体的には、『法華經』受持者が都率天に往生する記述や、『御義口伝』(日蓮講述)の「弥勒菩薩を法華の行者とする」という記述から、弥勒菩薩が日蓮宗において大切にされていたことを確認している。その上で、統秋が、『法華經』妙音菩薩品に描かれる、楽道を尊ぶべき思想を大切にし、日蓮宗信者として、楽人として、心の支えにしていた様子を『體源鈔』から読み取っている。最後に、『體源鈔』は、豊原統秋の楽人としての意識だけではなく、日蓮宗信者としての様子が看取できる楽書であると結んでいる。

審査結果の要旨(1200字以上)

由井恭子氏の論文は、『平家物語』の主要テキスト中から「芸能説話」を取り上げ、それらを精読・比較し、そこに潜在する種々の問題点を的確に析出して解明を試みたものとなっている。解明に当たっては、『平家物語』を中心に、『古今著聞集』や『古事談』などの中世説話や楽書、歴史資料などの、作品の内外から取り出してきた豊富な例証と比較しつつ結論に導くという手法を用いている。こうした手続きを経て、①『平家物語』における芸能説話生成の手法、②『平家物語』芸能説話における虚構の意図と編者像、③『平家物語』諸本比較から明らかになったテキストの特徴、④芸能にまつわる歴史的事実、⑤仏教と芸能の関係が『平家物語』に与える影響、などを解明したものとなっている。論述に当たっては、手堅い文献学的方法を貫いていることから、論拠、論旨は明快で説得力に富んでいる。したがって、本論文が抽出して解決に導いたところが少なくないのである。

本論文はそうした考察結果を、序結と、十六章五節に構成し、約八六一枚(四百字)で報告したものである。

以下、審査の結果を記すことにする。各章の概要と結論については上記に詳述したので、審査結果は、特に注目される章節を取り上げて言及することにする。なお、公開口述試問でなされた指摘も含めた審査結果となっている。

第I部では、『平家物語』芸能説話の中から、後白河院に関連する人物の説話を取り上げて考察を加えている。特に囑目されるのは、第三章の「以仁王と笛」と、第五章の「後高倉院とその周辺」の論考である。前者は、「延慶本」に、以仁王が鳥羽院伝来の笛を相承している記述に着目し、笛は当時天皇が学ぶべき学問の一つであり、特に堀河天皇、鳥羽天皇は笛を愛していたことから、「延

慶本」編者は、以仁王が王位を継ぐに値する人物であることを意図し、その正当性を訴えるために、その象徴的楽器として笛が選ばれ、名器、蟬折とともに以仁王を登場させたのではないかと結論付けている。実証的で説得力のある論といえよう。

後者は、「管絃御伝授記」の記述に基づいて、後高倉院が、藤原実宗により、琵琶の手ほどきを受けていたことを、明らかにしている。また、『文机談』の記述から、後高倉院が、実宗亡き後、孝道に琵琶を習い、さらに、その娘達を扶持し、孝時に琵琶を伝えている記述から、後高倉院と琵琶西流の人々の交流の様子と、後高倉院自身が琵琶の譜を蒐集し、注を施している事実を読み取っている。これまでにない新たな指摘として注目される。

第Ⅱ部は、平家に関連する人物の説話を中心とした論考となっている。ここで注目されるのは、第三章第三節の「経正竹生島詣考」と、第四章第一節の「重衡と千手前—酒宴における芸能場面—」である。前者は、経正の竹生島詣説話についての考察であるが、論者はまず、本説話が確認できるテキストとして、「覚一本」「屋代本」「盛衰記」「南都本」を上げている。そして、これらが、室町時代以降に増補され完成されたものであることを確認した上で、次の手続きとして、室町時代以前の竹生島の歴史や資料を調査している。その結果、竹生島は歴史記録も少なく、文学作品に登場する機会も少なかったが、室町時代になると、足利將軍家から信仰を得ることとなり、社会的にも注目されるようになったと結論している。その証左として、この時期に、『竹生島縁起』の増補改訂や、書写が再び行われ始め、また、比叡山でも竹生島への注目が高まり、『溪嵐拾葉集』などの記録にも残されているとする。そして、こうした時代背景のもとに、物語編者が、竹生島の記述を物語の中に取り込もうとし、琵琶や芸能の主人公として経正が選ばれたのではないかと論じている。説得力のあるすぐれた成果と認められる。決定的な反証が出ない限り、本説話生成に関する有力な論考となり得よう。

後者は、重衡と千手前の酒宴場面で「五常楽」「皇聲」「廻骨」の曲が演奏されたことに着目し、これらの曲目が、『極楽聲歌』『楽邦歌詠』『順次往生講式』にも見出されると指摘する。これらの関係について考察をすすめた論者は「当時都で流行した『極楽聲歌』のようなものを、真源が『順次往生講式』の中に取り入れて、その後『楽邦歌詠』のような講式練習用の抄出本が出てきたのではないかとする。また、本場面には、重衡の極楽往生を願う、今様や朗詠も配列されており、これらは『順次往生講式』の思想と重なっていることから、本講式は、説話構成に深く関わっていると論じている。本論も実証的手続きを経て論述されていることから、有力な学説の一つとなろう。

第Ⅲ部では、興福寺の常楽会や、楽器、万秋楽の秘曲について考察した論考が収められている。第一章では、『平家物語』の「延慶本」に、興福寺の「恒例ノ三会」について、「十四日舍利会、十五日涅槃会、十六日常楽会」と記されているが、興福寺の三会は、維摩会、正月の御齋会、三月の薬師寺最勝会を指すのが一般的であることから、先行研究ではこの記述は史実と異なるとされていた。そこで、論者は、『興福寺年中行事』『諸寺縁起集』『教訓抄』に見られる、常楽会に関する記述を精査し、興福寺常楽会が二月十五日を中心に、複数の日程にわたり開催されていたこと、それらの法会は、常楽会後夜や、法花会、舍利会などと呼ばれ、表記が統一されていないという事実を発見し、この事実に基づき、「延慶本」の記述は、誤りとは言い切れず、史実に近い部分もある、と結んでいる。諸資料を丁寧に読み解いた成果で、学会に一石を投ずる論考となろう。

第二章では、興福寺常楽会について考察している。興福寺常楽会は、大法会であったが、歴史資料が少なく、その実態は不明な部分が多い。しかし、論者は、楽人豊原統秋の『體源鈔』に着目し、興福寺常楽会の解明を試みている。その結果、常楽会が一四〇〇年代には衰退していたのではないかと、また、常楽会で還城楽、納蘇利、荒序、万秋楽などが演奏されたことや、猿笛という楽器を使用したこと、そして、蛮絵装束を用いたことなども明らかにしている。この指摘も実証的手続きを経た有益な成果といえよう。

第五章では、『體源鈔』における豊原統秋の信仰について考察を加えている。その結果、統秋が、『法華経』妙音菩薩品に描かれる、楽道を尊ぶべき思想を大切に、日蓮宗信者として、楽人として、心の支えにしていたと論じている。『體源鈔』が、豊原統秋の楽人としての意識だけではなく、日蓮宗信者としての様子が看取できる楽書であるとする点は、新たな地平を拓く見解となる。

以上見てきたように、本論文は、『平家物語』の中で語られる「芸能説話」をほぼ網羅しており、それらを独創的な視点から丹念に考察を加えた論考となっている。この分野を本格的に取り上げて研究した論考が少ないことから、本論文が「平家物語研究」において果たした役割は大きく、本論文の真価はまさにこの点に認められよう。

本論文の成果は以上のごとくであるが、本論文にはいくつかの問題点が存在していることも事実である。本論文の数編の論考について言えることだが、分析不足、論証不足の感が否めない。基

